彙報

○史學研究會

例會 九月二十八日(土)午後一時三十分より文學部第十八教室に於て開催、左の如き講演があつた。來會者約七十名。

行幸の鹵簿と神幸の列次　出雲路　通次郎氏

(その全文研究欄に掲載せられたれば梗概を略す)

地名の變遷に就て　澤潟久孝氏

最近吉野川上地方を旅行せるに因み、萬葉集に見ゆる彼地方の地名を現在の地點に比定するに就て主として丹生神社の位置に關する森口奈良吉氏の說を批評しつゝ地名研究の陷り易き誤謬を指摘し、河內なる語の意味に及んだ。

大會 十一月二十四、五兩日に亙つて昭和十年度、本會大會を行ふ第一日は午後一時より京都帝國大學樂友會館講演室に公開講演會を開き左の三氏の講演あり、來會者堂にあふれる盛會にして、其間例年の如く評議員選擧を行ひ前年度評議員全部留任となる。講演會後引續き同所に於て晩餐會懇話會を催し、出席者六十名。文學部講師にして今夏留學より歸朝せられたる會員足利淳氏の「ヤズドに於ける拜火敎」始め數氏の談話あり、午後十時閉會。

一、類聚國史に就て　坂本太郎氏

(本誌掲載の豫定につき梗概を省略す)

一、歷史學に於ける時代區分　原隨園氏

歷史の解釋には二つの立場がある。その一つは歷史の流れに斷面をつけて樣式化する考へ方であり、他の一つは歷史を連續自然的發展として考へることである、この二つの相對立した考へ方は歷史家の個性に歸せしめらるべきではなくそれは歷史自身の持つ兩面性から、卽ち歷史の特質から生ずるものである。この樣に歷史を樣式化して考へることは歷史學の進步をまたねばならなかつた。このことは史學史上近世に於てはじめて起つたことである。

然しながら歷史が發展であり流動である限り固定的なものとして樣式を考へることは非歷史的な態度である。卽ち、樣式を求めることも必要であり同時に發展を見ることが亦要求されるとすれば、樣式が時間的なものになる他はない。

時代區分は時間を基礎とした樣式である。時代區分を離れた純粹な樣式を求めることは非歷史的理解におち入る。歷史に於ける樣式はそれが時代區分である限りに於て歷史的である。歷史の樣式化は時代區分に必要な樣式でありまた之である限りに於て歷史的理解に必要な區分である。斯くて要するに時代區分が歷史の解釋に必要にして且充分な形式であると云へるであらう云々。

一、新唐書に就て　岡崎文夫氏

(本號所載)

第二日二十五日は西本願寺に殿堂、記錄、古文書、繪畫等を見學した、當日特に展觀せられしものゝ目錄左の如し。

一、熊野懷紙(國寶)　壹卷

一、伏見天皇御歌集(國寶)　壹卷
一、後奈良天皇勅書　壹幅
一、正親町天皇勅書　壹幅
一、和漢朗詠集　貳卷
一、善信上人繪(國寶)　貳卷
一、慕歸繪(國寶)　拾卷
一、顯如上人御消息　壹通
一、歎異鈔　壹卷
一、菩提心集　貳卷
一、證如上人日記　貳冊壹卷
一、織田信長誓詞　貳通
一、武田信玄書狀　壹幅
一、織田信長黑印狀　壹幅
一、織田信長黑印狀　壹幅
一、豐臣秀吉朱印狀　壹幅
一、豐臣秀吉朱印狀　壹幅
一、親鸞聖人自筆書狀(寫眞)　壹卷
一、惠信尼書狀　拾通
一、本願寺留守職相傳系圖　壹卷
一、銅　鐘(國寶)(拓本)　壹口

最後に右見學を本會の爲に快諾せられ特別の便宜を與へられた西本願寺當局に對し深厚の謝意を表す。

○京都帝國大學文學部創立三十年祝典記事

昨昭和十年は明治三十九年九月、京都帝國大學に創めて文科大學が開設せられてより正に三十年に相當するので、その後を承くる文學部に於ては之が紀念の爲、十一月二十三日祝賀式を擧行すると共に、爾後二日に亘つて記念講演稀書展觀、陳列室の公開、物故教官の追遠等の事を行ひ別に記念出版をなした。各科學會の講演會京大倶樂部の總會等また時を同じうして開かれ、現舊教官、卒業生學生等擧つて參會し、學部創立以來未曾有の盛況を呈した。

記念式　十一月二十三日(新嘗祭)午前十時四十分より本部階上ホールに於て羽田教授司會の下に擧行せられ、國歌齊唱の後まづ野上學部長の式辭あり、次で松井總長祝辭を述べ、引きつゞき教官代表濱田教授、舊教官代表松本(文)名譽教授並に卒業生代表羽溪教授等交〻立つて所感を語り、最後に學生代表史學科小田一郎君祝辭を朗讀して一旦式を閉ぢ、其後直に事務關係勤續者の表彰式に移り、鈴木增次郎氏外六名に對し京大倶樂部よりの表彰狀並に記念品及び東伏見伯爵家寄贈の木杯紋菓等が授與せられた。右終つて餘興に入り學友會音樂部員による管絃樂二曲並に文樂座の人形淨瑠璃「近頃河原の達引(堀川猿廻しの段)」が演ぜられ參會者一同の喝采を博した。當日の參會者は舊文科大學の開設委員であつた、谷本富、桑木嚴翼、松本文三郎、狩野直喜四博士を始め、松井總長、小西前總長、舊教官、物故教官遺族、近府縣大學高等專門學校等の代表者等を來賓とし、教官、卒業生、學生合せて千

餘名に達した。

記念講演 二十三日午後二時より法經第四教室に於て開催せられ左の如き講演があつた。

モーパッサンと其作品　教授　野上俊夫

考古學三十年　教授　濱田耕作

尚、當日は新村教授の講演もある筈であつたが、病氣の爲中止せられた。

稀書展觀 廿三、四兩日文學部第十七、八、九教室に於て各研究室並に教官所藏の稀觀書を選んで展觀した。中に就て史學科關係の出陳書目を擧ぐれば、

○國　史

一、三長記　古寫本　一卷
一、建内記　自筆本　二卷
一、弘安四年壬生官務家日記抄　一卷
一、梅松論　文明二年古寫本　二册
一、讀史餘論　新井白石著、小宮山楓軒書入本　三册
一、白石先生手翰　小宮山楓軒自筆寫本　九册
一、三國通覽圖說　林子平著　天明六年夏刊　一册
一、海國兵談　林子平著　寛政三年四月刊　三册
一、長等乃山風　伴信友稿　小杉溫邨補寫　六册
一、公私古印譜考證　藤貞幹寫　安永二年　一册
一、書皮譜　藤貞幹編　一册
一、丹後田邊府志　釋靈重著　寶永七年九月刊　三册

○西洋史

Macchiavelli, Nicholas, The Works of the famous——, Citizen and Secretary of Florence. London 1680.

Mariana, Juan de, Historia General de España. Tom. 1–2. Madrid 1678.

Colbert, Jean Baptist, Testament Politique de ——, La Haye 1693.

History of the Boroughs of Greet Britain. Vol. 1–2. London 1794.　(時野谷教授)

Frédéric le Grand, Oeuvres de ——. 32 vols. Berlin 1846–57.

Görres, Joseph, Teutschland und die Revolution. 2 Aufl. 1820.　(時野谷教授)

Parlamentstagebuch, Bericht über die Verhandlungen des ersten Reichstages des Norddeutschen Bundes. Leipzig 1867.　(同　上)

○地理學

Ortelius, Abraham, Theatrum orbis terrarum. 8th Latin ed. Antwerpen 1575.　(小野講師)

Apianus, Petrus, (Peter Bienewitz), Cosmographicus liber . . . . . studiose correctus, ac erroribus vindicatus per (Reinerum) 2nd ed. Antwerpen 1529.　(同　上)

Blaeu, Willem Janszoon & Joan, [Map of] China. Am-

sterdam ca. 1640.　　(同　上)

Speed, John, The Kingdom of China newly augmented. London 1626.　　(同　上)

Cluverius, Philippus, Introductiones in universam geographiam. 3rd ed. Leiden 1629.　　(小倉助教授)

○考古學

Paoli, Paulo Antonio, Rovine della Citta di Pesto detta Ancora Posidonia. Roma. 1784.

Newton, Charles, A History of Discoveries at Halicarnassus, Condidus and Branchidae. London 1862.

Wilpert, Giuseppe, Le Pitture della Catacombe Romane. Roma 1903.

Stukeler, William, Stonehenge. London 1740.

Canina, Luigi, Descrizione di Cere Antica. Roma 1838.

Cartailhac, E. & Breuil, H. La Caverne d'Altamira a Santillance près Santander (Espagne). Monaco 1906.

Lartet, Edouard & Christy, Henry, Reliquiae Aquitanicae. London 1865-75.

陳列館公開　二十三、四兩日右の稀書展觀と並んで陳列館並に心理學教室の公開が行はれ、陳列館にあつては考古學の陳列室の外國史、東洋史、地理等に於て夫々特別展觀を催して一般の縱覽に供した。

○國　史

國史研究室に於ては別項記載の如く第一陳列室に於て眞福寺善本の展觀を行ひ第二陳列室に於て、最近入手せる朝鮮民俗資料その他を陳列した。

○東洋史

演習室に於て標本寫眞圖書の外特に最近滿洲國より渡來せる拓本の類を陳列した。

一、標本及寫眞類

一、英佛獨各國立博物館所藏新疆及燉煌古畫寫眞

二、貴霜(大月氏)國貨幣　五枚

三、貴霜(大月氏)國貨幣模型

四、成吉思皇帝聖旨牌

五、乾隆得勝圖銅版

六、乾隆銅版畫得勝圖　印本

二、實錄類

一、皇明實錄　內閣文庫本鈔本

二、皇明實錄　北平圖書館本鈔本

三、滿文老檔　影寫崇謨閣藏本

四、滿洲實錄　影寫崇謨閣本

五、清朝實錄　影寫崇謨閣本樣本

六、李朝實錄　影寫太白山本

三、蒙文佛典類

一、蒙文甘珠爾(經部)佛典　鈔本

二、蒙文丹珠爾(論部)佛典　殿板

三、板本蒙文諸品積咒　承德某喇嘛僧房舊藏

四、拓　本　類

一、義縣萬佛堂北魏太和二十三年碑　漢文　拓本

二、義縣萬佛堂北魏景明三年碑（在滿洲國錦州省義縣萬佛堂）　漢文　拓本

三、韓瑜墓誌（在滿洲國錦州省朝陽大成殿內）　漢文　拓本　遼

四、韓檜墓誌（在滿洲國錦州省朝陽大成殿內）　遼重熙六年

五、遼八角塔人物像（滿洲國熱河省承德出土）　拓本

六、宜州大奉國寺金明昌三年碑　漢文　拓本

（在滿洲國錦州省義縣大奉國寺內）

七、張氏先塋之碑　漢文　拓本　元元統三年

八、張氏先塋之碑　蒙文　拓本　元元統三年

（在滿洲國熱河省赤峰縣烏丹城南方國公坟）

九、竹溫臺神道碑　漢文　拓本　元後至元四年

一〇、竹溫臺神道碑　蒙文　拓本　元後至元四年

（滿洲國熱河省赤峰縣烏丹城出土）

一一、遼道宗哀册文　漢文　拓本

（滿洲國興安西省白塔子遼慶陵發見）

一二、遼道宗哀册文（同上發見）　契丹文　拓本

一三、遼道宗宣懿皇后哀册文（同上）　漢文　拓本

一四、遼道宗宣懿皇后哀册文（同上）　契丹文　拓本

一五、得勝陀碑　漢文　拓本　金大定二十五年

一六、得勝陀碑　女眞文　拓本　金大定二十五年

（在滿洲國吉林省雙城縣石碑崴子）

五、圖　書　類

一、宋會要　徐松輯　食貨、蕃夷之部、不分卷、鈔本

二、大元一統志殘卷　鈔本

三、湛然居士集　清、吳錫麒手鈔本

四、明代戶口册殘簡及び官衙會計決算報告書殘簡

五、禮部志稿　鈔本

六、康熙廿七年補刊四譯館則　覆刻本

七、乾隆七年四譯館則　原刻本

八、皇清開國方略　清阿桂等撰三十二卷首一卷、殿板

九、皇清職貢圖　九卷　清永瑢等撰　殿板

一〇、關中勝蹟圖志　三十卷　清畢沅撰　經訓堂自刻本

一一、西域輿圖鈔本

一二、苗　圖　鈔本

○地　理　學

地理學教室は陳列室及び實習室を開放した。陳列室は例年の如く地球儀・機械類・土俗品等を觀覽に供し、實習室には日本・支那・西洋の古地圖・古書及び各國製の標式的な地圖類、學生の製作品等を陳列した。その中で古地圖古書の目錄を次に記す。

展觀古地圖古書目錄

日本の部

一、扶桑國之圖　（寛文二年）
一、日本圖　（延寶六年）
一、日本全圖　（延寶八年）
一、本朝圖鑑綱目　（貞享四年）
一、大日本國全備圖
一、大日本國圖　（元祿四年　石川流宣）
一、日本山海圖道大全　（元祿十六年　石川流宣）
一、本朝圖鑑　（寶永二年　石川流宣）
一、改正大日本備圖　（元祿時代　岡田自省軒）
一、大日本國大繪圖　（享保十五年　石川流宣）
一、改正日本輿地路程全圖　（寛政三年　長久保赤水）
一、文化改正拾遺日本北地全圖
一、房州津輕間海圖　（享和元年　船具職大野屋五左衞門）
一、東北六ケ國海邊之繪圖
一、山城國古圖　（寛延二年）
一、東西蝦夷山川地理坂調圖　（安政六年　松浦竹四郎）
一、間宮倫宗　韃靼紀行
一、平壤府古圖屏風

支那の部

一、皇明職方地圖　（明板）
一、廣輿圖
一、內府地圖　（乾隆十三排銅版圖の複製）
一、清代滇省輿地圖說
一、清代漕運圖
一、海防圖　（七省沿海圖說原本）

西洋の部

一、セバスティアン・ミュンスター世界誌　（一五五〇年　バーゾル）
一、ヨアン・ブラーウ　世界新地圖帳イスパニア篇　（一六四七年　アムステルダム）
一、同ブリタニア篇　（一六四八年アムステルダム）
一、ダンヴィル　支那新地圖帳　（一七三七年　パリ）
一、トマス・ジェファリ　西印度地圖　（一七九四年　ロンドン）
一、ラペルーズ　世界周航誌　（一七九七年　パリ）
一、ノルデンショルド　古地圖影本　（一八八九年　ストックホルム）
一、パウル・テレキ　日本地圖史　（一九〇九年　ブダペスト）
一、ラッツェル　アメリカに於る支那人の分布　（著者自署本　石橋教授所藏）

十五教官追遠　同じく二十三、四兩日學問尊攘堂に於て文科大學開設の爲に功勞のあつた初代總長木下廣次氏を始め、今日までに物故せられた教授上田　敏、內田銀藏、廚川辰夫、原　勝郎、藤代禎輔、坂口　昂、深田康算、澤村專太郎、藤井健次郎、桑原隲藏、三浦周行、今西　龍、內藤虎次郎、助教授植村清之助、教師クラーク等十四氏の肖像を飾り、その遺著を列べて、その學德を偲ぶよすがとした。

記念出版　文學部に於ては其創立三十周年を紀念せんが爲、西

田教授監修の下に國史研究室に托して「京都帝國大學文學部三十周年史」なるものを編纂し記念式當日參列者一同に頒つた。右は菊判三一六頁、本文、學部小史、學會誌、學生々活編の外、附錄として舊職員卒業生等の感想追憶文、文科大學設立に關する大西祝博士の手記、學部諸規定、諸表覽等を含み、啻に祝賀の記念たるのみでなく後代の爲にもよき史料となるであらう。なほこの編纂とは別に國文學教室所藏尼崎本萬葉集卷第十六帖葉壹冊と舊久原文庫所藏舊鈔本史記孝景本紀第十一壹卷とを夫々吉澤、澤瀉兩博士並に那波助教授の解說を附して玻璃版二色刷に複製刊行した。

各科研究會聯合大會　右の如き紀念諸行事につゞいて京都哲學會、史學研究會、京大國文學會、地理學談話會、西洋史讀書會、イタリヤ會、讀史會等の大會皆時を同じうして開かれたが、其詳細は夫々別に項を立てて記すところあるを以てすべて省略する。

眞福寺善本展觀　文學部國史研究室に於ては文學部三十周年記念諸行事と併せて、かの應安古寫の古事記を始め二十數點の國寶典籍を含み、學界に著聞せる名古屋市大須寶生院所藏眞福寺本の展觀を企圖し、十一月二十二日より三日間陳列館階上國史第一陳列室並に貴賓室に於て一般研究者の爲に公開した。陳列の圖書は左記目錄の如くであるが、夙に國寶に指定せられたるもの二十四點の外特に從來多く世に知られることなき神道關係の古鈔本を選び關係者の注意を蒐めた。

一、漢書食貨志　第四　（國寶）　紙背阿彌陀經義疏（嘉保二年寫）　壹卷
二、瑚　玉　集　卷第十二、第十四　（國寶）　紙背不空三藏和上表制集第三、第二　貳卷
三、翰林學士詩集　卷第二　（國寶）　唐鈔本、紙背不空三藏和上表制集第五　壹卷
四、遊　仙　窟　正平八年（文和二年）寫本　壹帖
五、玉　篇　中編　宋刊本　壹冊
六、新雕中字雙金　宋熙寧二年刊本　壹冊
七、大宋僧史略　南宋刊本　壹冊
八、廣　韻　卷第三　宋刊本　壹冊
九、禮部韻略　第一、第二、第三、第五　北宋刊本　參冊
一〇、新樂府略意　第七　寬喜二年寫本　壹卷
一一、新樂府註　正嘉元年寫本　壹冊
一二、紹聖新添周易神敎曆　壹卷
一三、將門記　（國寶）　承德三年寫本　壹卷
一四、日本國現報善惡靈異記　中下　（國寶）　貳卷
一五、本朝文粹　卷第十二　（國寶）　壹卷
一六、同　右　卷第十四　（國寶）　弘安三年寫本　壹卷
一七、同　右　卷第十四　（國寶）　建保五年寫本、卷末建保二年、行圓追善願文　壹冊
一八、口　遊　（國寶）　弘長三年寫本　壹冊
一九、尾張國解文　（國寶）　正中二年寫本　壹卷
二〇、古事記　（國寶）　建德二年・文中元年（應安四年五年）寫本　參帖

三、秘藏寶鑰　卷上　建德元年寫本　參帖
三、扶桑略記　貳帖
三、水　鏡　壹册
三、文　鳳　抄　弘安元年寫本　八帖
三、擲　金　抄　卷中、下　弘安元年寫本　貳册
三、金言類聚抄　弘安元年寫本　貳帖
三、明　文　鈔　卷二、三　正安元年寫本　貳册
三、本朝詩合　壹卷
三、聖德太子傳曆　正平五年(觀應元年)寫本　壹册
三、七大寺年表　(國寶)　永萬元年寫本　貳卷
三、續本朝往生傳　(國寶)　建長五年寫本　壹帖
三、拾遺往生傳　上、中、下　(國寶)　參帖
三、後拾遺往生傳　上、中、下　(國寶)　正嘉二年寫本　參帖
三、本朝新修往生傳　(國寶)　正嘉二年寫本　壹帖
三、三外往生記　(國寶)　正嘉二年寫本　壹帖
三、往生淨土傳　上、中、下　建長六年寫本　參帖
三、法花經傳　參帖
三、弘法大師御傳　上、下　(國寶)　貳卷
三、弘法大師行化記(國寶)正平元年(貞和二年)寫本　貳卷
四、弘法大師傳記　(國寶)　壹卷
四、高野贈大僧正傳　(國寶)　外題高野大師傳　壹帖
四、大師御行狀集記　(國寶)
外題弘法大師傳、天授元年(應安八年)寫本　壹册
四、弘法大師御入定勘決記　上、下　(國寶)
正平十九年(貞治三年)寫本　貳帖
四、弘法大師御入定勘決抄　(國寶)　壹册
四、高野口決(國寶)　正平廿二年(貞治六年)寫本　壹卷
四、大神宮諸種雜事記　第一、第二　貳册
四、諸道勘文　壹册
四、高宮盜人闖入怪異事　中卷　紙背文書拾遺　壹卷
四、元應二年高宮御事　壹卷
五、麗　氣　記　拾六卷
五、天照大神御天降記
外題御降臨記　正平元年(貞和二年)寫本　壹册
五、類聚神祇本源　拾五册
五、神　道　集　永享五年寫本　參册
五、大田命訓傳　伊勢二所皇大神御鎭座傳記　壹卷
五、熊野三所權現金峯金剛藏王降下御事　壹卷
五、往代希有記　壹卷
五、類　聚　鈔　敎相部第四、第五、第六
弘安五年寫本、建治二年寫本　壹帖
五、天照皇太神儀軌　壹卷
五、天下皇太神本緣　壹卷
六、伊勢二所太神宮神名秘書　壹卷
六、元　々　集　建德二年寫本　壹卷
六、伊勢二所太神宮神名秘書　紙背大和葛城寶山記　壹卷

六三、神道簡要　應永二年寫本　壹卷
六四、神器傳授篇（元々集）　壹卷
六五、寶劍圖法　壹卷
六六、天照皇太神遷幸時代抄　壹卷
六七、御鎮座傳記　壹卷
六八、日詩貫記　壹卷
六九、天都宮事太祝詞　壹卷
七〇、天津祝詞　壹卷
七一、兩宮形文深釋　壹卷
七二、大元神一秘書　壹卷
七三、神祇講私記　壹卷
七四、神皇系圖・神皇實錄　壹卷
七五、神皇正統錄　四册
七六、自性斗藪　內題神性東道記　壹卷
七七、麗氣制作抄　元中六年寫本　壹册
七八、天地靈覺秘書　壹卷
七九、本朝諸社記　壹帖
八〇、神體圖記　貳卷
八一、神體圖　壹卷
八二、熱田宮秘釋見聞　壹卷
八三、熱田講式　壹帖
八四、神法樂觀解深法　卷下　壹卷
八五、御遷宮宮飾行事　興國六年（貞和元年寫本）　壹卷
八六、御流神道灌頂內堂儀式　壹帖
八七、大日本國開闢本緣神祇秘文　正平十三年（延文三年）寫本　壹卷
八八、類聚既驗抄　神祇十　壹册
八九、俊乘房重源伊勢太神宮參詣記　參卷
九〇、太政官符類　壹卷
九一、東大寺古文書　四拾參通　參卷
九二、東大寺具書　五卷
九三、勅書令旨等　六通　壹帖
九四、大須北野山眞福寺寶生院由來記　正德三年寫本　壹卷
九五、寶生院圖書目錄　貳拾參册

內田三浦兩先生追悼法要　昨昭和十年は大正八年內田銀藏博士が逝去せられて十七年に相當するので昭和六年逝去の三浦周行博士の七回忌をも取越し右の三十周年記念行事とは別個にその門下たる西田直二郎、江馬務・栗野秀穗、牧野信之助、中村直勝等の諸氏によつて追悼會が發起せられ、十一月二十五日午後三時より寺町二條妙滿寺に於て法要を營んだ。兩先生の未亡人を始めその知友並に生前の同僚持野直喜、小西重貞・矢野仁一氏等の外門下生等都て八十餘名參列した。

○地理學談話會

例會（第四回）　九月二十六日於地理學實習室

一、大阪中之島の地理學的研究　和田俊二氏

一、京都衣笠扇狀地の沖積地質と先史地表　神尾明正氏
一、南洋土人の航海圖　織田武雄氏
一、岐阜縣揖斐郡春日村小神宮笹又及坂內村廣瀨淺又の移動聚落(出作り)に就いて　田中秀作氏

例會(第五回)　十月二十四日於地理學實習室

一、地名研究の諸問題　鈴木福一氏
一、新潟市の景觀　須藤賢氏
一、十津川雜觀　長谷部健史氏

談話會大會　文學部創立三十週年紀念を兼ねて談話會大會を十月二十五日文學部陳列館第二教室に於て開催す。石橋教授も出席され聽衆會場より溢れ頗る盛會であつた。演題及び講演者は左記の如くである。

一、挨拶　小牧實繁氏
一、隱岐列島の水產製造業に就いて　安藤鏗一氏
一、ラテンアメリカに於ける石油資源の地政學的考察　別技篤彥氏
一、奧州街道と白河町　室賀信夫氏
一、北海道の甜菜糖業に就いて　織田武雄氏
一、日本最初の船法度に就いて　藤田元春氏
一、西都原古墳群に就いて　松本博氏
一、中世村落の樣相　米倉二郎氏
一、屋根の傾斜と降水量の關係に就いて　島之夫氏
一、氣山津の變遷　小牧實繁氏
一、伊吹山四近の積雪と人文との關係　田中秀作氏
一、我が近世に於ける米作發達の一面　內田寬一氏
一、挨拶　石橋五郎氏

尙、十月二十三、四の兩日は陳列室・實習室を一般に開放し、實習室には新古の各國地圖類・古書を陳列した。展觀の古地圖・古書の目錄は別に記した如くである。〔安藤〕

○西洋史讀書會

例會　昭和十年度第三回例會は九月二十八日午後六時より樂友會館にて開催。左記二君の讀書紹介及研究の發表ありて十時前散會。出席者時野谷、原兩教授、鈴木、井上兩講師を初め二十一名。

一、J. Calmette; L'Élaboration du monde moderne.
〔CLIO—5〕　二回生　石澤慶一君
一、G. Vico に於ける歷史像　二回生　詫又男君

例會　昭和十年度第四回例會は十月三十一日午後六時より樂友會館にて開催、左記二君の讀者紹介後、盛んなる討論あり十時頃散會。出席者、時野谷、原兩教授、村田、井上兩講師を初め二十六名。

一、Gasquet, F. A.; Henry VIII and the English Monastries.
二回生　川野政三君
一、Franz, G.: Der Deutsche Bauernkrieg.
二回生　小澤吉見君

大會　第三回西洋史讀書會大會は文學部創立三十周年を記念してその祝賀日に當る十一月二十五日午後一時より陳列館第一教室に於て、村田數之亮氏司會のもとに公開講演會を開催。遠く各地方よりの來會者も多く、聽衆堂に滿つる盛會であつた。會は先づ原先生の開會の辭に始まり左記の演題にて、各講演者いづれも眞摯なる態度で研究の成果を發表せられた。

一、開會之辭　文學博士　原　隨園先生
一、人文主義に就て　文學士　武藤醇吉氏
一、最近の史學思潮について　文學士　中山治一氏
一、近世英國對外貿易の轉換に就て　文學士　堀　雄夫氏
一、アウグスチヌスの世界史論　文學士　市川文藏氏
一、獨逸に於ける Humanismus 運動と Wittenberg 大學　文學士　三喜田熊藏氏
一、アルント漂浪記の史料的價値　文學博士　時野谷常三郎先生
一、閉會之辭　文學博士　原　隨園先生

即ち先づ武藤氏は復興期の人文主義の諸問題の中、主として「人文主義者とその宗教性」に就て、次で「人文學者とルネサンス社會」に就て述べられた。中山氏は現代の危機的性格が歴史思想の上にどのやうに反映せられてゐるかを、Troeltsch, Croce, Meinecke, Beard 等の思想を中心に、又特に Nietzsche の史學史上の意義についても論ぜられた。堀氏は近世初期の英國の對外貿易が、從來外國商人の手を經て行はれてゐた受動的なものから、能動的なものへの轉換を國內商工業の發展と關聯して綿密に述べられ、次で市川氏はアウグスチヌスの生涯、「神の國」に示されたる信と不信との對立を中心とする基督教的な史觀に就て詳述せられた。三喜田氏は伊太利の Humanismus より獨乙の Humanismus 及びその代表的な Humanisten に就て、次で獨乙の大學と、特に Wittenberg 大學と Humanismus との關係を詳細に解明せられた。かくて、時野谷先生の諧謔に滿ちた御講演(本號論文)を最後に原先生の閉會の辭で終つた時、暮れ易き初冬の夕は既に濃き夕闇につつまれてゐた。引續き四條、萬養軒にて會員一同晩餐を共にし、和氣靄々裡に懇談久しく、盡きせぬ歡を後に午後十時散會した。

例會　昭和十年度第五回例會は十二月五日午後七時半より樂友會館にて開催。本學部講師黑田正利氏を迎へて左の如き演題にて興味ある御講演を聞く。出席者時野谷、原兩教授、藤、鈴木、井上、村田諸講師を初め二十六名、午後十時前散會。

一、Cosimo de' Medici に就て　文學部講師　黑田正利氏

○東洋史談話會

第四十七回例會　十月二十四日(金)　於樂友會館

熱河北滿史蹟踏査談　秋貞實造氏
外山軍治氏

第四十八回例會　十一月十四日(木)　於樂友會館

秦の閩中郡に就いて　和田清氏

○支那學會

九月例會　九月二十八日(土)　午後六時　於學生集會所

漢文解釋に於ける連文の利用　湯淺廉孫氏

北魏に於ける部の解散と北方貴族　內田吟風氏

十月例會　十月二十三日(水)　午後六時　於學生集會所

詞人の姓氏に就て　中田勇次郎氏

詩經の日蝕に就て　能田忠亮氏

○民俗學會

例會　十月一日午後六時　於樂友會館第六號室。夏期休暇中の採集旅行の座談會で、府下愛宕郡久多村の宮座その他、遠州見付町の裸祭(鴇田忠正君)、信州別所の祭禮(池田源太氏)の報告あり、終つて西田教授の解說によつて、十六ミリ映畫陸中毛越寺延年祭、志摩伊雜宮(伊勢別宮)御田植神事を見る。出席者西田教授以下十七名。

洛外の民俗採集は久しく中止してゐたが、十月五、六兩日池田源太氏以下學生二名は宇治田原村に行き、主として宇治田原鄕の宮座に就いて調査した。

大會　十月二十九日午後六時半、樂友會館にて近畿國語方言學會と合同して、西下中の柳田國男氏を迎へて大會を催した。

開會の辭　柳田國男氏

副詞形容詞の史的展開　奥里將建氏

方言と民俗とに涉りて　西田先生

閉會の辭

○讀史會

文學部三十周年記念讀史會大會　本年度秋期大會は文學部創立三十周年記念祝賀會の最終日の夜を飾るものとして、十一月廿五日午後六時半より樂友會館に於て山根、寺尾兩氏司會のもとに開催され、來聽者堂を塡め、稀に見る緊張と活氣の裡に十一時に及んで漸く會を閉ぢた。當日の研究發表及び講演の概要は左の如くである。

○研究發表の部

久米多寺長老明智上人に就て　木村武夫氏

泉南郡久米多寺に關しては、坪付狀によつて知られるが、平安朝の事は不明であり、鎌倉時代になつてやゝ史料が得られるが、問題となるのは吉野朝時代である。當時の長老明智上人に就ては從來資料缺乏の爲知らるゝ所極めて少なく、それに關する研究も僅かに黑板博士の先鞭と今津工學士の論文があるに過ぎない。彼は佛敎學者の間に云ひ傳へられた所によれば、華嚴の學者と知られて居たが、鎌倉時代に復興したと云はれる都率信仰を有したものであらうかと思はれる。金剛寺文書の調査から上人の傳記に於て年代考證等によつて未知の部分を補ひ、後醍醐天皇や楠木正成との關係を豫想しうるとする建前から其勤王方面の業績に就て實證されんとしたが時間に非常な制限があつた爲、吾人の聽かんと欲する所を聽かなかつた憾がある。他日の機會を待つ。

森尙謙と護法資治論

前田　一良氏

森尙謙が不偏不黨の態度を以て、中世に於る佛敎思想が、啓蒙思想に相應ずべき新しい世界觀をもつて登場した近世儒敎によつて排擊され、神佛を含めた神祕的超越的なものが儒敎の合理性と實踐倫理に據まづいたに對し、敢然として「佛法を護り政治を資くる」根本的理論を明らかにする事によつて、時代の變遷と共に必ずしも健實に發展しなかつた儒敎の空虛な理論と低級な主觀主義への墮落に應酬した又他敎の理解なしにそれを排斥するの不可を說き、儒佛の詳細な比較研究から、その理に於て一致し實際の運用を異にするのみなるを明かにし、儒佛共に本分を正し佛敎は超越的なもの解明を使命とするが感情に走るをいましめ、儒敎は現實のみの皮層淺薄に止つてはいけないとした。近世朱子學、古學、國學への發展の過程に於る思想史上の森尙謙の位置を正しく顧みようとするものである。

明治革創期の國體明徵運動

鈴木　祥造氏

現今の國體明徵運動の時に當り、かゝる運動が明治革創の時に存在して居た所にまで溯る事は意味なしとしない。當時の運動を對外的なものと對內的なものに分つて考へ、前者はキリシタンに對する防禦の爲であり、後者は廢藩置縣までは政府の基礎薄弱で將軍を天下の君となし天皇を新君と考へる輩や、實際問題として封建制度によつて生活の保證された士族階級や百姓等が新政府の諒解に苦しみ各地に暴動となつて現れたのに對し、國體を明らかにする運動がおこつた。それが神官僧侶を打つて一丸とした實行機關によつて、全國的に驟然と展開し、新聞の出現と共に國民的敎化運動となつた。又かゝる主旨を徹底せしめんとする爲に發行された親切な註釋が丱餘種殘つて居る。それを資料として當時の國體明徵運動の如何なる性質のものであつたかを知らんとする。時間の都合で其結論を割愛されねばならなかつた。

口分田の收穫に就て

赤松　俊秀氏

我國上代の研究上樞要な一問題である口分田の收穫に就ては、かの令義解の田令に一町につき五百束の事が見えて居る爲、從來此れが通說となつてゐたが、其の後澤田吾一氏の精密なる計算の結果一町三百束と算出され、爾來定說となつて居つた處、本年に入り突然喜田新六氏の新說が發表され、町別五百束の收穫を主張せられてゐる。乍併之を要するに、兩說何れも法定收穫高をのみ論據としてをるのであり、かゝる事は單なる計算上の問題で、如何に精密なる計算が行はれたとしても、それが必ずしも不正確なる實收穫に合するものでない事は、現今に於てもよく見得る所である私には口分田の收穫高が法定のものよりも少なかつたとは思はれない。否、實は遙かに多かつたのであるといふ確證があるとて正倉院文書や類聚三代格中の資料を以て說明せられた。

生活と法律

藤　直幹氏

法の內容が如何なるものを含むかを述べるのではなく法の性格が各時代の社會の集團形態に應じて如何なる意味をもつかに觀點を置く。その一例として武家法制を取りあげる。其の理由は素朴

な自然發生的なものであるが故に社會と極めて密接な關係にあるからである。御成敗式目の特徴とも考へられるものは第一に形が雜駁であつて雜多な生活內容の種々層に亙つて雜然と並べられて居る。第二に各々の條理が極めて具體的であつて、社會事象を抽象する事によつて諸事象を整理する事をしない。それは武士生活が集團的であり、集團以外に於て自らの生活を見出し得ず、從つて個人の生活が御家人の色に塗り潰され、凡てが頼朝の傘下にあつて單一にして公私の區別尠なく、公法と私法の區別が見られない。斯く生活單純なる爲に具體的な例が法的權威をもち得たのである云々。之は次回を約束する豫告篇に過ぎぬと。

○講演の部

精神史に就いて　　東伏見邦英氏

精神史に就て種々の見解があるが、歷史の根底に働きかけてその變遷を變遷たらしめるものが人間精神である事を認識して、その精神の顯現としての諸事象を見、以て具體的全體的に歷史を把握せんとする歷史を云ふ。

歷史事象は此の奥底に流れる精神の客觀化されたものに外ならないが、客觀的事象を通じて歷史を掘り下げ精神の動向を理解するには、自己の精神內容を豐かにするの外はない。何となれば對象となる材料は、それのみでは死物に等しく我々に働きかけて來ないからである。而してそれが終局に於ては人間そのものゝ理會に一致する。

精神史の扱ふ精神が、單に物に對する心、客觀に對する主觀であるならば、それは單に唯物史觀と對蹠的なる觀念史觀に過ぎない。精神史の「精神」はかゝる對立に立つものではなく、物をして物たらしめると同時に、心をして心たらしめる人間の根本的精神力であり、それを廣く「生」として云ひ表はす事の出來るものである。

歷史書の形態雜攷　　吉田三郎氏

獨逸の一般人民はゲーテを、佛蘭西のそれはモリエールを、英國人はシエクスピアを讀まない。彼等を讀むものは彼等の眞の國民である、一般國民はこの水準線以下に殘されて居るが、これは人が登らねばならぬ絶頂であると云ふ意味の、或歐洲の文豪が藝術と生活と理想、常識人及然らざる眞の國民と藝術的傑作との關係に就て述べた含蓄ある言葉は、吾國の歷史書の傑作なる慈圓の愚管抄、親房の神皇正統記、山陽の日本政記に就ても當て篏まる。それ等の各々の著者の態度に共通な點は、動亂の中に立ち、利己的な立場を離れ、一見平凡と思はれる眞理を說いて居る。それがかへつて人々に迫り動かす點でもある。今日望まるべき歷史書の形態は、進步せる學問の業績を基礎として、社會、政治、生活等の眞實本質を發見し、心ある國民が本質的なるものを、そのあるべき位置に復歸せんとする念願を强ひられるのでなく、讀みつゝ味ひつゝ自然に抱き得る如き叙述が、史料の精微なる研究の上に構成せられるべきであらう思はれる。

所謂ガルトネル事件の全貌　　牧野信之助氏

所謂ガルトネル事件とは、幕末開國直後に於て函館に來た獨逸

の一商人ガルトネルなる者が、官邊に取り入り、土地を租借して、其所にヨーロパ風の耕作を施したといふ事に絡まるものである。

鎖國政策の持續困難を覺つた幕府が、進んで學國自强を計らんとし、文久の頃外國人技師を招聘して、北海道の富源開發に資するといふ狀勢の內に、ガルトネルは函館奉行によつて、試みに或る土地を貸與せられ、遙々獨逸本國より種々の耕作機具を移入して開發に取り掛つた。かゝる內に維新となり舊幕府脫走軍の函館に上陸するや、その永井函館奉行との間に明治二年二月第一回のガルトネ條約が成立し更に同年六月には、新政府の淸水谷函館總督との間に第二回の條約が締結される。此の二回の條約によつて、要するに口蝦夷七重村附近三百萬坪を九十九年間租借せんとしたのである。其の間には奉行の私的契約の問題も織り込まれ、遂に明治政府の知る所となり、極力之を回收せんとしたが、一年半に渡る紛糾の末、結局償金六萬貳千五百弗を以て一件落着に及んだ此の事件に關しては、從來、全然ガルトネルの惡辣なる詭謀によるものとされるが、必ずしもさうではなく、彼の殘した手記によると、北海道の溫度、濕度、家畜、果樹は勿論、さては個々の使用人等に關しても、詳細なる意見を述べてをるといふ有樣であり、又、後に北海道の開發がアメリカ式の大農法によつたにしても、唯其れのみではなく更に歐洲の中小農法を入れる事が適當であつた事などを考へるならば、こゝに改めてガルトネルの業績をも考へなくてはならない。

樂浪古墳の發掘

梅原　末治氏

終始幻燈を使用されつゝ、本年度樂浪地方發掘の概要な簡明に興味深く說明された。

大正初年關野博士の發掘以來、其の出土品等よりして、支那漢代の文化の基準が明かにされて來た事はいふまでもないが、第九號墳なる木槨墳を發掘して、優秀なる出土品多數を得て以來は、之を中心にして專ら發掘が續けられた。而して樂浪の遺蹟は、實に四百年の長きに渡るものであるから、今後は木槨墳のみならず、塼槨墳の調査を進め、兩者の關係等を考へる必要がある。蓋し此の兩者は、決して時代的先後を附すべきものではなく、互に混淆して存在せしものであらう。私は昭和七年以來、塼槨墳の研究を主目的として、發掘を續けてゐる、と。〔以上龜井、宮脇〕

○東京帝國大學文學部史學科學生　東北北海道旅行記

例年秋季運動週間の前後に行はれる國史專攻學生の見學旅行は今年は目的地の關係上夏季休暇中に試みることゝなり、西田、中村兩先生をはじめ一行四十名八月二十六日夜の急行寢臺の人となる。御尊父御逝去の爲、旅行をお取止めになつた藤先生がわざわざ一行を驛に見送つて下さる。

翌廿七日早朝東京着。中村一良氏のお迎へとお世話により、上野驛前旅館に少憩して、史料編纂所に向ふ。殆ど不意打ちの訪問にも拘らず學生六名が、昨年の關西旅行に於ける本學の芳志を謝すとて、我々の爲に急遽茶菓の用意をして歡迎さる。互に簡單な

自己紹介の交換以上の事は許されなかつたが、我々に好印象を與へずにはおかなかつた。後、渡邊、高柳、岩橋、井野邊各編纂官の説明にて列品見學。大日本史料各編別に文書、記錄、畫像等原本の外に摹本や寫眞をも交へてその數多く、一々品目を擧ぐるをえないが、通覽して一應この事業の組織とその性質を知りえたやうに思ふ。次いで宮內省圖書寮の史料並に書庫見學。こゝでは、日本國見在書目錄古鈔本や類聚符宣抄保安古鈔本などに注意を惹かれた。晝食は各自自由にとつて、午后一時半上野發青森行急行をとらへる。驛でお元氣な喜田先生に拜顏出來たのは悅ばしき限りであつた。東京文理大の松本彥次郎先生がこゝから愛媛御同伴で一行の中に加はられる。車中八時間、夜九時半に至つて漸く仙台に着、先輩山本林氏に迎へられて境屋旅館に投宿。

　翌廿八日は數台の自動車に分乘して、大崎八幡、青葉城、瑞鳳殿、東北大學等を驅け廻る。禮現造で有名な大崎八幡の拜殿は小規模ながら、桃山時代のティピカルな樣式を持ち、丁度我々一行が經過して來た距離と、文化の飛躍的移植に於ける大々名伊達氏の勢力とを思はしめる。此の事は次のスケジュールに現れた平泉の中尊寺に至つて感を深めざるを得なかつた。伊達政宗の廟所瑞鳳殿は、淡い繧繝彩色を以て飾られ、その意匠構造すべて陰陽の取合せによるといはれるが、日光廟の如き徒らなる華美の見られぬ內にも、桃山の名殘りが思はれて、何となく親しみを覺える。次いで東北大學のアカデミッシュな雰圍氣の中で古田先生等の御案內にて、陳列史料（蝦夷關係の古代東北史料及び考古學的遺物）

を見た。晝前には、苛酷な旅程が、今少し居り度い我々を仙台から追ひ立てる。午后二時平泉着——一九二〇年台の猛烈なフォードが身震ひして一行を待つ。運轉手は、相手が歷史のスペシャリストの卵と知つてか知らでか、怪しげな義經と辨慶のストーリーを、ひどい東北訛で浪花節のやうに物語り聞かせながら、危い位のスピードで極めて無神經に車を操る。片言隻語も解するに苦しみ、啞然たる內に中尊寺に着く。欝蒼たる檜の大木の中に、藤原文化が千年近くも大切に抱擁され來つた。晴雲半ばする中を幾らか汗ばみながら緩やかな勾配を登つて行く。足の台が高くなるにつれて、途中の展開する景觀には、關東や關西に見られない素朴なよさがある。さう遠くない所に北上川が銀河のやうに鈍く光り蜿つて居る。いたいけな子等がズーズー辯で土產物をすゝめるので、ついいらない物も買つて了ふ。小學校時代から久しい間名前にだけ親しい——それだけ期待をかけた金色堂を目のあたり見る。今まで腦裡に漠然と形造つてゐた概念が實物によつて殆ど根本的に修正されるものだ。これは單に文字通りの「百聞一見に如かず」ではなく、「百聞」を經て後の「一見」に大きな價値を認めるものである。內部は金色燦然たる阿彌陀、勢至、觀音が夫々奧州豪族三代をシムボライズし、その他の護佛が端正を好んだ藤原時代の位置を几丁面に守つて居る。須彌壇や天井に見られる纖細華麗な螺鈿、蒔繪の剝落度も平等院よりは遙かに少なくて、よく當時の面影を留めて居る。尙、經藏、寶物庫等を拜觀したが、今記憶に殘るのは、あまりにも寫實的な、あまりにも人間的な一字

金輪佛である。半眼の瞼の下に夢幻的な瞳孔が見え、唇の口紅(ルージュ)も濃く、しなやかに印を結び、したゝるばかりの襞が柔かに身を包んで居る。尊姿全體の均衡と流麗な線も亦、藤原時代の中に生れた事を充分に首肯せしめる。自分の興を惹いたのはひどく鏤著した清衡、基衡、秀衡の所持と傳へられる太刀であるが、武家の擡頭、進展に隨伴して日本刀が愈ゝ日本刀としての姿を取り來る、卽ち直刀から彎刀に轉開せんとする、云はゞ黎明期の徑路を知る一つの資料として重要なものであらう。東鑑に堂塔四十餘宇、禪房五百餘宇と見える毛越寺の廢墟は、盛時を偲ぶよしもないが、現地に來て見れば何となく胸を打たれないわけには行かない。寺傳の、ひなびた延年舞、田樂、みやびた勅使舞を特に請うて演じて貰う。不知不識の間に行はれる傳承の力は、考へて見れば驚異に値する。四肢の複雜な操作、それに微妙な身のこなしの綜合された運動が動いて居るまゝ毀れる事なしに傳へられて行く。それ等は何百年、何千年を貫いて確かに生きて行く。ラフカディオ・ヘルンの人生觀に對して西田幾多郎博士が「……彼は我々の單純なる感覺や感情の奥に過去幾千年來の生の脈搏を感じたのみならず、肉體的表情の一々の上にも祖先以來幾代かの人格の複合體である肉體は無限の過去から現世に連るはてしなき心靈の柱のこなたの一端に過ぎない、云々」と云つて居られるのはヘルンの思想が神祕的に過ぎるにしても、ともすれば可見的な事物の表面しか見えない我々に、生の連りに於て、祖先の心臟の鼓動を聽く事を敎へるものである。ムーヴィーやカメラ班が盛に活躍する。手持無沙汰をよい事にした連中は膝坊主をかゝへて笙の和音の中で陶然と、スローなリズムの中に惹き入れられて了ふ。

再び自動車で一ノ關へ引返して午后六時半の靑森行で北上を續ける。漸く旅の味ひもこまやかになつて來て、袴を脱いだ先生と先輩と學生が親しく打つて一團となり、同じ目的への進動過程にある事の仕合せを意識する。又、人格の接觸に於ける得難い機會と思へばこそ、他愛もない話でさへ貴重であるやうな錯覺を起す。そして自然と人との中に、自己がこんなにも客觀的に觀照される事は尠いであらう。午后十一時半に下車して午前零時半に乘船する。三等船室に雜魚寢をして、夢を津輕海峽に浮べるが、數時間の後には、早くも、圓い窓の部厚なガラスを通して、灰色の水平線が搖れてゐる。あの吼えるやうな汽笛が腹に泌み渡つて、愈ゝエキゾティックな色彩を持つ函館の姿が現れた。午前五時といふに牧野先生が一行をお迎へ下さつて、大部隊の東道に當られる。(以上、龜井)

北海道上陸第一歩は小雨しきりに、前夜の睡眠不足も手傳つてか、些か寒さを覺える。今日は、かねて一同期待せし松前行である。函館より木古内まで鐵路二時間、更に木古内より福山まで自動車約二時間半。白神岬へと南下するのである。木古内でバスに乘る頃から雨は愈々降りしきつて、今更ながら旅にある身を思はしめられる。車窓の左右に廣がる茫々たる牧場には、放牧の牛馬が雨に濡れながら、歸路を急ぐのか、我が子を引き具して小走りに遠ざかり行く。さては、渺茫たる田野の間に點在するバラック

式の民家が、屋後の一むら二むらの樹林のさやぎを背景に好もしき調和をなしてゐるなど、すべては蝦夷地を思はしむるもののみである。福島といふ所あたりから左手に近く津輕の海を眺めながら、さゝやかな漁村を次々に通過する。波打際に並ぶ漁家のトタン屋根にたゝく雨の脚にも北海を思ふ。吉岡、荒谷、大澤など一寸内地臭い名前の漁村を通り過ぎ、峠を二つ三つ越えると、やがて遥かに松前城の天守が望まれる。雨に煙る白壁の三層樓、親しさを覺えずには居られない。福山町長以下の御好意で町役場に導かれ、暫時休憩の後晝食を取る。古の奉行所の跡であるといふ。門前に堀を控え、後に小山を負うた此の粗末な低い建物は、よく幕末の蝦夷地を思はしめる。更に此の事を深く感ぜしむるものは松前城址である。僅かに殘る白堊の三層樓と追手門は、安政元年に落成したと云はれるが、景勝の地を占めながら、猶その不調和にして落着かざるものあると共に、その粗雜さは、よく幕末の邊境を物語るものと云へよう。

松前氏覇業の萠芽は、古く室町時代足利義政治世の頃、武田信廣此の地に來つて蝦夷の叛將を仆せしに始まるといはれるが、其の政權確立して蝦夷の統制全きを得たのは、慶長年間福山城の落成せし頃からであらう。爾來德川時代を通じて、藩主の施政宜しきを得、常に全道文化の中心となり、殊に、はる〴〵近江商人の來つて漁場の繁榮をはかるなどの事があり、港の町として殷賑を極め、戶數五千を超ゆるの盛況を呈したと云はれる。この事は、昔日の面影全く無き今日に於ても、尙其の止むる舊刹に於て、よく當時の片影をうかがふ事が出來る。現存する寺院は、其の草創多く室町季世にあるやうであるが、其の大部が明治戊辰の兵火に罹り、現今僅かに假堂を保つのみとは寔に遺憾である。光善寺、龍雲院、法憧寺、法源寺、阿吽寺、法華寺、正行寺、專念寺等多數の寺院の内、法憧寺は文明二年の創建と傳へられるが、今其の面影なく、たゞ寺後老樹欝葱たる中に、松前家累代の墓所を存する。中に、七世松前公廣の室、大炊御門慶子の墓を見出した吾々京都人一同、一種の感慨なきを得なかつた。阿吽寺は其の草創明かならざるも、五尺の不動尊立像を本尊として弘法大師作と傳へる。尙、推古佛と稱する七八寸の半跏像一躰を藏すれども、鎌倉時代以降の僞作と思はれた。かうして、各寺院何れも、文書、遺物等價値あるものは殆ど之を所有しないが、尙此の如き邊鄙狹隘の地に、寺院の多數に存在せし事、更に興味深き事柄と云はねばならない。そして今一つ注意すべきは、この古き町が、德川時代の城下町として北海道唯一のものであるといふ事である。かくて一同種々の感懷に耽る内、午后三時近くにもなつたので、雨降り止み降らずみの中を再び、自動車にて木古内へと引返す。近き將來鐵道の完成と共に、漁港として新しき發展をなすであらう福山町を思ひつゝ、此の廢墟の町に名殘が惜まれた。午后六時五十分木古内驛發の列車を待つ間に、雨も漸く晴れて、一同福山歸りの疲れを醫せんと牛乳のガブ呑みに忙しい。北へ行く程牛乳が旨くなると聞きながら、グッと呑み下した牛乳に、甘露の味ひを知つたのも旅のせいであらうか。やがて汽車に搖られて函館に到着した

のは、もう夜の九時頃であつた。出迎へのバスで函館郊外の根崎温泉へと向ふ。大瀧旅館に宿泊。初めての温泉泊りの事とて、一同元氣頓に加はり、先生方までプールの第一線に立たれて、御自慢の古風な泳ぎを見せられる。

明くれば三十日。快晴。早朝露を踏み分けて、遙かにトラピスティーヌの鐘の音に耳澄しつゝ宗教的感傷に浸つた人もあつたかに聞く。今日の見學豫定は五陵郭と函館市立圖書館とである。圖書館長岡田健藏氏の御案内で五陵郭を一巡する。幕末維新の箱館の役に榎本武揚、大鳥圭介が最後の血戰を試みた所である事は言ふまでもないが、安政四年起工、元治元年竣成その間唯一卷の和蘭築城書を手引としたと云はれる此の城郭は、今尙滿々と水を湛へる外濠、苔むした城壁、我國古來の築城とは異る規模等、すべて幕政より新政への世を思はしむるものを持つて居る。次いで、些かゴタ〳〵した感じのする函館市街を抜けて、途中立待岬と呼ばれる眺望絶佳の灣頭に詩人石川啄木の碑を訪ね、不遇なりし故人を偲びつゝ圖書館へ急ぐ。かねて期待せしだけに、一同眼を輝かしながら筆記に忙しい。大廣間一杯に並べられた史籍、文書、繪圖等、蝦夷地關係の好資料たらざるはない。北蝦夷地行程記(間宮林藏自筆)や、松浦武四郎、谷元旦、高橋作左衞門等の紀行の書多數を初めとし、殊に、函館最初の露西亞領事ゴスケウイッチの著なる「和魯通言比考」(函館最初の希臘教の司祭イワンマホワの著「ろしやのいろは」(萬延二年木版本)等注意を惹く。文書では、箱館役機密書翰集(二卷)に目が止まる。繪圖には又興味深きもの多く、嶽橋教章の函館戰爭圖繪を初め、臘虎膃肭臍漁之圖說、佐竹侯函館七居濱操練圖(秦檍丸筆)、蝦夷古代風俗(二卷)、文化五年會津藩唐太出陣繪卷、蝦夷鳴圖說(七冊)等、更に加ふるに、安永松前江差六曲屏風(一雙)がある。是等、繪としての價値はともかく、幕末の蝦夷地を一見了得し得る好資料であらう。殊に六曲屏風は、福山江差兩地に於ける住民の實生活の狀況を、繪卷物風に、彩色麗はしく、丹念に畫きしものであつて、頗る興趣深きものがあつた。以上の外著しきものに多數の外國書がある。ホラス・ケイプロンの開拓使への公翰、バチェラーのアイヌ語辭典、レセップのカムチヤッカ旅行記等を初めとして、シベリヤ、カムチヤツカ、日本等への探險旅行記が多數見られ、尙蝦夷地の動植物に關する著述も二三注目を惹いた。かくて正午過、圖書館の方々の御好意に感謝しつゝ、一同史囊を滿した喜びの內に辭去し、午後一時廿分函館發の急行列車で、あこがれの札幌へと旅程を急ぐ。大沼、駒ヶ岳の絶景や、內浦灣を越えて室蘭の突端への遠望などに目を樂しませたり、道々通過して行く驛名に好奇の心を抱きつつ、車中暫やかに過すほどに、北地の夏とはいひ條、もはや日もとつぷり暮れた八時前札幌へ到着。阿部旅館に投宿。この夜はビール、牛乳、玉黍蜀に滿腹して、旅の疲れを忘れる。

翌卅一日は旅行の第六日目である。風は少しあるが、よく晴れ渡つて申分なき天候。先づ徒歩にて北大附屬植物園へ向ふ。幅廣き街路、而も整正とした町並は、よく並木と調和して、多分にエキゾティックな匂ひを漂はせる。時たま過ぎ行く荷馬車が、首に

鈴を着けた親子の馬に引かれて、バラック風の建物の蔭に走り去るのも北海殖民地の首府に相應しい光景である。植物園内は一面濃綠の芝生、それに名も知らぬ老大木が欝葱と生ひ立つて、幽邃の感が深い。北海道大學高倉新一郎氏の案内にて園内の博物館を見學す。北海道産の動植物、鑛物等の標本並にアイヌ關係の土俗資料を陳列す。アイヌの使用せし最後の土器といはれる南千島出土の土器や、北海道式と呼ばるべき土器多數を初めとし、樺太産の鮭皮、或はアイヌの繩綴の木皮船、狩獵具、及び幣その他の祭器、住居の模型等、アイヌ古來の生活の全貌を知にる充分である。殊に今夕は、白老のアイヌ部落に赴いて、彼等の生ける姿を見んとするのであるから、極めてよき參考となつた。芝生の上ではカメラが頻りに活躍する。次いで北海道大學へ、果てしなく續く綠の芝生、空を摩すばかりの楡の老樹、その間に點在する白堊の校舍、その自然に調和した雄大な光景が、大學の校庭に展開する。圖書館で特に吾々の爲に陳列せられた多數の史料を見學す。その大部は幕末に出版せられた蝦夷地關係の地圖であるが、伊能忠敬の蝦夷國測量圖(寛政十二年)、林子平の蝦夷國全圖、近藤重藏の蝦夷地全圖(享和三年)を初めとし、松前藩より幕府へ獻上せし元祿郷帳附圖(元祿十三年)、幕命により幕吏一行の製せる蝦夷興地全圖(天明五年)、南部藩蝦夷地經營圖(萬延年間)、大日本國郡輿地路程全圖(長久保赤水)等の繪圖の外、東西蝦夷場所境目取調書(松浦武四郎)、ガルトネル地所一件書類(明治九年二月)、函館駐在外國官吏來翰綴(一八六五年)等は、注目すべきものと思はれる。この地所關係の書類の中に、支那人の花押を見出して非常に面白く思うた。陳列品を一覽した後、新築の農經教室の望樓に登つて展望を恣にす。眼界限りなき田野、牧場、その間をうねり流れる河川、ほんたうに原始そのまゝの大自然が實にのび〳〵と廣がつてゐる。未だ目に見ぬ境に深い自然を味つて歩く旅人は、その自然の堂奥に自己を放下することによりほんたうに大自然の愛を感得し、深い人の心を味ひ得るであらう、など思ひつゝ、暫く去り難き心持を抑へ得なかつた。正午近き頃北大を辭して、グランドホテルにアイヌ風俗映畫を鑑賞する。狩獵、漁業等の日常生活や、熊祭などの祭祀の有樣がスクリーンに躍動する。殊に熊祭第一日に、熊を壓殺する直前、之を慰める爲にするといふ踊は、その形に於て、我々の盆踊りを思はせたが、手よりも寧ろ腰と上半身を機械的に振り動かす動作に、素朴なものを感じさせる。晝食後自由に市内を見物。一同買物に忙しい。かくて午後二時頃、この瀟洒、雄大にして而も近代的な明るさを持つ北海の都札幌に名殘りを惜しみつゝ、白老に向ふ。窓外に展開する茫漠たる曠野を眺めて、僅かに十勝、釧路の原始的大平原を想像する。此の車中かねて道廳や札幌市から頂いた種々の案内記類を、好讀物として、一同に分配する。かくて白老に下車したのは日没近い五時半過であつた。粗末な民家の立ち並ぶ、それでも何となく落着いた感じのする驛前の田舍道を二三丁行くと、白老郡白老村大字白老なる標柱が見られる。之を過ぎてより人家無く、遠くに散在する草葺の屋根を目當てに畠中の一本道を急ぐこと二三丁にしてアイヌ部落

に達する。先づ白老第二尋常小學校を參觀す。訓導の說明によれば、部落の人口四百四十四人、男女同數、漁業農業を主とし、小學生の成績概して佳良の由である。面白く思つたのは、兒童の成績品中、習字、圖畫がすぐれて居た事で、かゝる方面への技術的才能を思はせた。それより白老病院長高橋房治氏の配慮にて酋長野村家を訪ふ。住居は粗末な掘立小屋で、屋根は草葺、土間には葭の筵を敷き、其の上に管筵を重ねる。家を建てるには、先づ屋根を造り、之を四方に立てた柱の上に載せるといふ。東側には窓を開け、西を出入口とする。部屋は中央に爐を切り、東北の隅に祭壇を設け、西北の隅を主人夫婦の寢所としてゐる。何しろ狹い一室へ四十人許りが入り込んだ事とて毀れはせぬかと懸念する。薄暗い蠟燭の光の中で、やがて酋長夫婦により、爐に向つて火の神への拜禮が行はれ、次いで民謠が二つ三つ夫人によつて歌はれる。いさゝか哀調を帶びて、追分を思はしむるものがある。續いて、刀を提げて立つた酋長、足踏みしながら、掛聲に合せて、熊祭の踊を見せて呉れる。祭壇の前に雜然と並べられた祭器や家具、屋根裏に吊られた刀劍や漁業用の槍など、すべては好奇の心をそゝる。さうかうする內に夜のとばり全く垂れて、蠟燭の瞬きも深くなる頃、此所を辭去する。屋外ではアイヌ細工と自稱する木彫の熊やパイプを、いたいけな子供達が買つて呉れとせがむ。それも、ほんたうのアイヌ細工ならまだしも、或は遠く本土あたりから大量に持ち來らすのではないか、などの惡推量が頭に浮ぶと、もう思ふのが嫌になる。一同三々伍々喋い夜道を驛へ引返す。

古來天產豐な離れ島に永住して低いながらも晏如たる生活をなし、部落間の鬪爭の外は、悠然、歌や說話を事としたアイヌは、其の神事や風俗習慣を語り傳へた幾多のユーカラを現今尙傳承し、祭の酒宴の席に歌ひ出されるといふ。こんな事を思ふにつけても、今眼のあたりに見る彼等が如何に興行的であつたことか。自然のまゝの彼等の生活を見ようなどとは到底無理難題に過ぎぬかも知れないが、些か期待を裏切られた思ひは之を如何ともなし得ない。併し、あの可憐な子供達が、殆ど一人の例外もなく、ひどく眼を患つてゐたのを見ては、今更彼等のみすぼらしい寧ろ悲慘な生活を思ひ、たゞ〳〵滅び行く人々を思はずには居られなかつた。爐邊に歌ひ出された民謠も、たゞ感傷的な哀愁の中に、深く印象づけられるに過ぎない。

白老より二十分にして、午後九時過登別着。更にバス二十分で溫泉へ。第一瀧本館に宿泊。溫泉量の豐富に感心しながら入湯の後、十時過より、大廣間に於て、先生以下一同會食す。牧野先生の御配慮でビールの御馳走に與りつゝ自己紹介に移る。西田、中村、牧野諸先生のユーモアたつぷりの御話に一同愈々打ちとけて、學生連も自己紹介に氣焰を上げるもの續出。たゞ時間の關係上充分に歎を盡し得なかつた事は遺憾の極みであるが、和氣藹々裡に自室へ引き取る。

明くれば九月一日。早朝より泉源地獄谷の見物に出かける者もある。溫泉の效き目覿面に、今朝は一同顏色がよい。八時半頃、溫泉街を後に、バスで登別驛へ向ふ。鬱蒼たる原始林の山峽を溪

流に沿うて自動車が上り下りする度に散見する廣々とした牧場には、今更ながら、なつかしさを感ずる。午前九時頃登別を發す。窓に移る海濱の景色は、寧ろ內海を思はしめる。虻田驛で洞爺湖電鐵に乘り替へ、正午頃洞爺湖に着く。淸水滿々、蝦夷富士、有珠岳南北兩岸に相對して佳景たるを失はぬが、その柔い感じは、琵琶湖を聯想する。晝食の後、大沼へ向ふ。途中、長萬部にて乘り替へ、此所で、永々お世話になつた森先輩にお別れして、一路南下する。午後六時半頃大沼に到り第二紅葉館に投宿。既に宵闇深まり、爲に本道屈指の明媚の風光を賞し得なかつたのは物足らぬ感じがしたが、これは列車中よりの眺望で我慢する。晩餐後、牧野先生の御好意で、土地の船頭の追分を聞く。この少し田舍じみた宿の廣間で、靜かな夜に流れる朗々たる節調は、アイヌの民謠とは異り、ほんたうにのび〳〵として、大沼湖上舟中にあるの思ひあらしめた。北海道滯在最後の夜と思うてか、夜更けるまで湖畔を逍遙した雅人も多かつたらしい。

翌二日は早朝大沼を出立して、午前七時三十分函館發の聯絡船に乘る。上屋まで牧野先生御見送り下さる。今度の旅行の最大目標とされた北海道ももうこれで去るのだと思ふと、些か呆氣ない氣もするが、省みて我々の收獲を思ふ時、莞爾たらざるを得ないと共に、北海道滯在中一切の點に御配慮を忝うした牧野先生に厚く御禮を申上げたい。

銅羅や汽笛に港の情緒を味ひつゝ、出帆後は海路平安。船中一同頗る元氣でデッキゴルフに興ずるなど、船旅ののどけさを思はせる午後一時頃靑森を發して、今夜の泊り酒田へ急ぐ。車中退屈なるまゝに、西田、中村兩先生を中心に座談に花が咲く。夕刻、秋田にて乘換の時間を利用して、自由に秋田城阯等を見物し、七時頃、此所を出發して、十時頃酒田へ入り、酒田ホテル投宿。

翌三日は本楯柵阯の見學である。好天に惠まれ一同元氣に、先づ光丘文庫へ向ふ。光丘神社祭神本間四郎三郎光丘の遺志を承けて創立したものと云はれるが、高臺を占めて淸楚な感じのするいゝ圖書館である。列品並に書庫を見學す。松平定信の姉仙壽院の書翰、本間光丘の書翰、池田玄齋の病間雜抄（七十三冊及編外）、四條隆資の書狀（性無勳院御房宛、最勝光院役召次禪童衣服事云々）等は注意すべきものと思はれたが、此の外、藤原鎌倉兩時代の和鏡十箇餘及び城輪柵阯の柵木等を存する。その他、古瓦、土器等の考古學的遺物も見られる。次いで城輪柵阯見學の爲、自動車にて本楯に赴く。山頂を雲に隱した鳥海の麓、美しい稻田の間の一筋道を約二十分にして、本楯村に達する。先づ發掘品陣列所にて柵木、並に奈良朝末平安朝初期の古瓦や祝部土器を見るが、それ等にも既に田舍じみた地方的なものを感ぜしむるものがあつた。續いて實地踏査に移る。西門阯とされる所では、水田中に圓柱の根十二本が約一尺の地下に整然と並び、三間二面の八脚門の跡であるといはれる。次いで、柵木最初の發見地並に北門阯等を廻つて、大體同樣の狀況を見る。而して其の全貌は、方約四百間の地域の周緣地下約一尺の所に、徑約七八寸の圓柱、角柱の配列せるものであつて、四邊の各中央には門阯と考へられるものを持

つのである。さて其の地理的位置を大觀すると、庄内平野の北部に位するが、東は一帶の丘陵地で、少しく北寄りに鳥海山が屹立し、西には海岸線に沿へる砂丘が南北に長く連つてゐる。かゝる地形の眞中を秋田方面に通ずる濱街道が南北に走つて、一見、要害樞要の地を思はしめる。かくて要するに此の遺跡は、奈良朝の頃、出羽地方蝦夷の平定の爲の一種の城郭として設けられたものであり、而も其の内容は都城に類し、官府・寺社、民家、田畠等が其の中に取り入れられて居つたものであらう。そして、彼の城輪神社こそは、其の柵内に在りし鎭守の神であらうなど考へる。初めて見る王朝時代邊疆の遺跡に、いさゝか理解困難を感じながらも、土地に卽して見る事の重要さを思ひつゝ、正午前見學を終へて、酒田市へ引返す。主として自動車中よりの見物ながら、この酒田の町には、非常な好印象を植ゑ付けられた。碁盤割に區劃された市街の、よく揃うた町並に、自らにしてにじみ出てゐる洗練された落着きは、德川初期以降、米の集散地として繁榮を極めし東北の港の町を思はしむるに充分である。かくて午後一時過、酒田驛發の列車に乘る。見學場地少き事と、一同の疲れを思うて富山泊りを中止し、少しく長きに過ぎる京都までの汽車の道中を案じつゝも、ひたすらに歸路を急ぐ。但し、未だ休暇中のせいか、途中にて一行より分離する者多く、車中次第に人を減じて、いささか寂寥を感ずる。長岡では岩城氏に、入善では米澤氏に迎へられ、結構なお土產を頂いて、早速御馳走に與る。

明くれば九月四日、そぼ降る雨の中を、七時半頃京都驛に歸着す。此の時一行、西田、中村兩先生以下僅かに十餘名。それでも互に大部隊の、而も長途の旅行を無事終へし悅びの色に滿されつつ解散す。今年初めて、試みに行はれし夏期旅行の成功を思うて喜びに堪へない。〔以上、宮脇〕

會報

○評議員改選

昭和十年度大會(十一月二十四日)に於て會則により評議員の改選投票を行ひ、その結果前年度評議員全部留任せり。

○評議員會開催

十二月三、四兩日評議員會を開催、左の事項を議決し、併せて會務報告、並に雜誌編輯に關する打合せをなせり。

一、評議員分擔變更の件
一、執筆者謝禮變更の件
一、編輯事務に關する件

○「史林總目索引」頒布

先號に豫告せる「史林總目索引」は大會當日に出來上り十二月上旬會員諸氏にそれ〴〵贈呈しましたが、尚同索引は一部定價八拾錢(送料四錢)を以てお頒ちしますから、御希望の方は發行所京都市西洞院通七條南入、內外出版印刷株式會社史學研究會係(振替口座三二九五五)宛直接御注文下さい。

○會員動靜

入會

廣島市廣島文理科大學東洋史研究室　鹽見源一郎氏
(杉本直治郎氏紹介)
京城帝大法文學部內　稅田利秋氏
(玉井是博氏紹介)
京都市下京區下珠數町東洞院西入　藤井弘氏
(野上俊靜氏紹介)
京都市上京區寺町廣小路下ル五一　江坂長四郎氏
京都府下船井郡八木町　八木茂美氏
京都市中京區堺町三條上ル　田中綠紅氏
京都帝大地理學研究室　室賀信夫氏
名古屋市中區惠方町一ノ一八　都島昌義氏
東京市小石川區日山御殿町一二四　淺野忠允氏
京都市東山區今熊野南日吉町七九　愛宕松男氏
岐阜市岐阜師範學校內　中島周一氏
京都市中京區釜座通二條上ル　堀內他次郎氏
(以上鹽見高年氏紹介)

轉居

東京市本郷區駒込林町二百十三　太田熊太郎氏
京都市左京區淨土寺眞如町一　野原方　內海十郎氏
東京市豐島區長崎東町二丁目七五七　村上直次郎氏
京都市左京區田中大堰町二三三　澤方　小野義彥氏
京都市伏見區深草寶塔寺山町　本田義英氏

京都市左京區松ヶ崎小竹藪四五　　鹽見　高年氏

退　會

樋畑正太郎氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄

時野谷常三郎著　國史精髓（現代篇）　歷史教育講座第二部　著者　東洋文庫

津田左右吉著左傳の思想史的研究　吉田勘兵衛氏

横濱新田圖繪　湯川弘文堂

木村武夫著　大阪地方と寺院　史學會

史學雜誌　四六ノ一〇、一一、一二

歷史地理　六六ノ四、五、六　日本歷史地理學會

史苑　九ノ四　立敎大學史學會

史學研究　七ノ二　廣島史學研究會

史潮　五ノ二、三　大塚史學會

史學科研究年報　二　臺北帝大文政學部

人類學雜誌　五〇ノ九、一〇、一一、第八、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、附錄　東京人類學會

京城帝大史學會報　八　京城帝大史學會

考古學雜誌　二五ノ九、十、十一　考古學會

社會經濟史學　五ノ六、七、八　社會經濟史學會

史迹と美術　五九、六〇　史迹・美術同攷會

文化　二ノ一〇、一一　東北帝大文科會

鄕土研究　信濃　四ノ九、一〇、一一　信濃鄕土研究會

南方土俗　三ノ四　南方土俗學會

長崎談叢　一六　長崎史談會

法學論叢　三三ノ四　京大法學會

經濟論叢　四一ノ四、五、六　京大經濟學會

國學院雜誌　四一ノ一〇、一一、一二　國學院大學

社會學徒　九ノ一〇、一一　社會學徒社

史學科研究年報　二　臺北帝大文政學部

美濃國鄕土史壇　一ノ一〇、一一　一信社出版部

國立北平圖書館々栞　八ノ三、五、六　國立北平圖書館

浙江省圖書館々刊　四ノ五　浙江省立圖書館

Toung Pas（通報）XXXI 3—5　M. P. Pelliot

長崎高商創立三十周年記念論文集　長崎高商研究館

皇學　三ノ三　神宮皇學館館友會